

コトバカっ!



コトバカ
言葉家……言葉を操る専門家。言葉にバカに詳しい人。言葉にバカみたいにこだわる人。

コトのほかバカ。コトによるとバカ。コピーライターの俗称。

上から読んでも相川藍、下から読んでも相川藍。コトバカの相川藍が言葉についてコトバカルっ!

アナログ手紙の憂鬱

年賀状ってなんだか面倒な習慣だけど、受け取ってみるとやっぱりいいなあって、今年もしみじみ思った。忙しい人が、思わずにっこりするような手書きのメッセージを添えてくれたりすると感動はマックスに!

だけど今年は、印刷された文章でありながら、しばし呆然とするほど心を動かされたものがあつたから、必ずしも手書きがいいってことでもないなと実感。メールで済ます人も多いし、何もしない人だっているけど、そのせいで気持ちが薄いとかがそういうことはないわけだ。なあって書けば書くほど、手書きしない自分への言い訳になってしまっただけ。

きちんとした長文手紙を最後に書いたのはいつだろう。思い出せないくらい昔のような。最近では手書き用の便せんを常備していないし、そもそもペンで文字を書くこと自体が苦手。字が下手というのが主な理由だが、受付で名前を書くのもプレッシャーを感じてしまう。用意されているのが筆ペンだったりすると緊張はマックスに! そんな時、受付の人が「お名刺でもいいですよ」なんて微笑んでくれると神様のようにみえる。

ついでにいえは印鑑押すのも苦痛。以前、区役所の窓口で、加減がわからずにギューっと押したらベチャって血糊みたいになって、窓口の人に「あーあ」とため息をつかれたのがトラウマなのである。

要するに不器用なことなんだろうけど、郵便物の開封も難関のひとつ。手紙を受け取るのは大好きだから、嬉しくて早く見たくて、ペーパーナイフやハサミが見えたらないと、当然手を使う。きれいに開く時もあるしズタズタになる時もあるけれど、ズタズタの時に限って中身は招待状で、恐ろしいひとことが書かれているのだ。「本状の封筒をご持参ください」。さあどうする? このスタスタの封筒をよそゆきのバッグに入れてパーティーに行くか私? 必死にハサミでスタスタを整えていくうちに、やたらと小さな封筒になってしまい、状況は悪化の一途。えーん、お願いだから、パーティーで本状の封筒を提出させるのはやめて。

相川 藍 (言葉家)

丸の内文学賞 (大賞)、朝日広告賞 (最高賞)、インターネット書評コンテスト (最優秀賞) 受賞。早稲田大学第一文学部卒。コピーライター。